岩崎力の仕事

報告　松浦寿夫

二〇一五年の初夏の時期であったろうか、岩崎力先生のご逝去の悲報を奥様からの書状で知ることとなり、私事にわたるが、大きな悲しみとともに、先生とともに過ごすことができた僥倖としか呼びようのない時間を反芻する日々を過ごすことになった。それはまた、学生として、同じ大学院の後輩として、また僭越ながら同僚として過ごしえた日々のなかで多くの教えを受けながら、何一つとしてその恩恵への負債をお返しできていない事実に愕然とせざるを得ないという意味で深い悔恨を強いる日々でもあった。それはまた、多くの恩恵を得ることになった先生のお仕事を再び手にとってみる機会をもたらすものでもあった。そして、筆者の素朴な確信は、目の前に圧倒的な質量として現前する先生のお仕事は、決して終わるこのないという点で無限性に開かれた教育の場であり続けているという事実に集約されるといっても過言ではない。

作家、岩崎力の仕事は何度となく、つねに新たな仕方で読まれるべきものとしてここに存在している。この否定しがたい事実を言明し、この終わりのなさを確証する機会を多くの方たちと共有できないだろうかという願望こそが、二〇一五年十二月六日に本学アゴラ・グローバルホールにて開催されたシンポジウム、「岩崎力の仕事、終わりなき生、終わりなき言葉」の起点に他ならない。それは、この企画を総合文化研究所の企画として実現させる決断を躊躇なく行った、本研究所所長の和田忠彦氏、実質的な企画構成ならびに膨大な実務のすべてをお引き受けくださった本学の博多かおる、白水社編集部の鈴木美登里の両氏のご尽力なしには、この企画が充実した成果を達成することはできなかっただろう。また、奥様からは先生のご直筆のお原稿、書籍、ユルスナールからの贈り物、写真など、たくさんの貴重な資料をお借りすることができ、シンポジウム前後の三週間にわたって図書館に資料展示を行うことができ、また、シンポジウム当日には、会場にてさらに資料展示を行うことも可能になった。

また、改めて指摘するまでもなく、このシンポジウムの成功は、今回の私たちの依頼を快諾し、貴重であると同時に示唆に富む発表をお引き受けくださった登壇者の方にもっぱら負うものである。冒頭での和田氏による今回の企画の趣旨説明の後に、作家の堀江敏幸氏による基調講演が行われた。ヴァレリィ・ラルボーへの関心からの岩崎先生との出会いに始まり、ラルボー生誕の地であるヴィシーを訪問された際に、さまざまな人々から「岩崎力さんをご存知ですか」と問いかけられた逸話への展開によって、岩崎力というひとりの文学者が、国境、言

語、職業といった領域画定の境界線を横断し、いわば友愛の領域を瞬間的に交し合う不意の目配せのように拡張していく様相を喚起させるという点で、きわめて充実した講演であると同時に、今回のシンポジウム企画者たちの曖昧な意図に明確な形を提示するものであった。

その後、岩崎先生の同僚として本学でフランス文学の教鞭をとられた西永良成氏、岩崎先生から学生として教えを受け、岩波書店の編集者として活躍された小口未散氏のお二人から岩崎先生の思い出を語っていただいた。多くの興味深いエピソードが提供されたが、アラン・レネの「ヒロシマ・モナムール」の撮影に通訳として参加された岩崎先生の声と咳とがこの映画のなかに残されているという西永氏の回想はこのたえず反復的に聴取可能な声の痕跡を示唆するものであった。また、小口氏が指摘された東京外国語大学闘争のさなかの「造反教官」としての岩崎先生のプロフィールの紹介もまた、岩崎先生の首尾一貫した理性的な姿勢と同時に東京外国語大学執行部の非論理的な暴挙とを明晰に対比させる点できわめて示唆的な指摘であった。

第二部はテーブル・ロンド形式のもとで、小倉孝誠、中野知律、澤田直、堀江敏幸の四氏が登壇され、筆者が司会を務めた。いずれも優れたフランス文学の研究者であり、また多くの翻訳に携われている登壇者の方々から、それぞれ簡単な報告をいただき、そのうえでさらに岩崎先生のお仕事を振り返る討議を行うことになった。小倉氏からは、ユルスナールの『黒の過程』の翻訳に際して、岩崎先生が自分がこの書物を翻訳するには若すぎたという感想をお持ちになっていた事実から、成熟の問題と声の肌理との関連についての指摘があり、中野氏からはプルースト研究の観点からの岩崎先生のお仕事の紹介があり、とりわけ、プルーストとラルボーの読書論――いずれも、岩崎先生が翻訳されているのだが――、との対比から読書と翻訳に関する議論が展開された。また、澤田氏は、岩崎先生との実際の出会いはごく僅かしかなかったが、「翻訳者としての岩崎力」との出会いを通していくつものフランスの小説を発見することになった個人的な経験を語り、堀江氏は岩崎先生が自らの翻訳の改訳にあたり、句点を一つ付け加えられたエピソードから、句点の一つがただそれだけで声の肌理を大きく変貌させてしまうことに自覚的であった岩崎先生の翻訳作業に注目することによって、岩崎力を翻訳者としてではなく、ごく端的に作家とみなすべきであるという説得力に満ちた提言がなされた。

その後、会場にいらした多くの聴衆の方々からの貴重なご発言もあり、充実した時間を 共有することできた一日であったと筆者は確信している。また、多くの方が繰り返し指摘されたように、岩崎先生のご著書、『ヴァルボワまで』の再刊と、『ふらんす』誌に一年間にわたり連載されたユルスナールをめぐる美しい回想的なテクストの書物としての刊行を筆者もまた強く望みたいと思う。

また、かつて、各国文学の代表的な翻訳者が一同に会する様相を示していた東京外国語大学において、しかも、これらの翻訳者たちによってその大学の名声のきわめて大きな部分が保証されていたのに対して、翻訳という営みが示すこの上もなく高度な知性と感覚との成果に対しての敬意をほとんど喪失したかのような愚かさが広がりを示す現在の大学環境を前に、今

回のシンポジウムは明確に異議を提示する機会でもありえたはずだ。

最後に、改めて、ご登壇いただいた方々、会場にいらしてくださった方々、後援の白水社、協賛のプルースト研究会の皆様への深い感謝の意を記しておきたい。この一日、「あなたは岩崎力先生をご存知ですか」という問いとともに美しい友愛の空間を現出させることが可能になったのは、もっぱら皆様のご参集に負っている点は否定しがたい事実だからだ。

付記：白水社刊の月刊誌『ふらんす』二〇一六年二月号には特集〈翻訳者の仕事〉として、本シンポジウムをめぐるエッセイが、和田、堀江、澤田の三氏により寄せられている。